

「書簡体論文」の可能性と課題

矢守克也 京都大学 防災研究所

Katsuya Yamori Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University

要約

本論文は、書簡の形式をとる論文（「書簡体論文」）の意義と課題について、理論的に考察したものである。「ナラティブ・ターン」を踏まえれば、言葉による記述とは独立に外在する事実を観察し、観察した事実を論文上でできるだけ正確に表現するというスタイルのみを絶対視することは生産的ではない。むしろ、成立しうる社会的現実の一つが、論文上で、言葉によって構成され提示されると考えることが必要となる。この場合、論文の記述形式は、研究の知見に付随する副次的な産物ではなく、知見を構成する本質的な要素だと言える。この前提に立って、本論文では、「書簡体論文」の成立可能性について考察するための糸口として、まず、書簡体小説に注目した。具体的には、書簡体小説が成立した背景に関する社会心理学的な考察、および、同じく小説に留目し、その文体上の特徴について、詩の文体と対照させて分析を試みたバフチンの文体論に依拠することによって、「ユニヴァーサルな記述形式」、および、「ローカルな記述形式」という2つの対照的な記述形式を導出した。次に、双方の性質を併せもつ新たな記述形式として、「インターローカルな記述形式」を提起した。最後に、「書簡体論文」を、「インターローカルな記述形式」を実際に具現化した事例として位置づけ、その特徴と課題について考察した。

キーワード

書簡体、心理学論文、インターローカリティ、バフチン、小説

Title

Writing Psychology Papers in an Epistolary Style

Abstract

A theoretical investigation was conducted on the possibility of writing psychology papers in the form of personal letters. If we adopt "narrative turn" as an epistemological and a methodological meta-theory, then clearly, it is not productive to limit ourselves within the traditional writing style of psychology, in which a single true fact is objectively identified and described in scientifically precise language. An alternative style, which reflects social constructionist thinking, is also possible. Such a style assumes that one of the many possible realities is constructed socially, and presented in the form of narrative discourses in a psychology paper. Using this principle, we have first identified two different description styles, "universal descriptions" and "local descriptions", based on Bakhtin's ideas on the styles of novels, and social psychological analyses of epistle novels in the 18th century. Next, we have proposed an alternative way of writing psychology papers using an epistolary style, as correspondence between two or more people. This style realizes "inter-local descriptions" that combines and mediates both characteristics of universal and local descriptions.

Key words

epistolary style, psychology papers, inter-locality, Bakhtin, novel

1 はじめに

本論文は、書簡の形式をとった論文（「書簡体論文」）が、心理学の学術論文として成立する可能性、および、その特徴と課題について、理論的に考察したものである。

「ナラティヴ・ターン」（やまだ、2006）を踏まえれば、言葉による記述とは独立に外在する事実を観察し、観察した事実を論文上でできるだけ正確に表現するというスタイルのみを絶対視することは生産的ではない。むしろ、成立しうる社会的現実の一つが、論文上で、言葉によって構成され提示されると考えることが必要となる。この場合、論文を記述する形式が、論文が記述する内容の2次的で外生的な派生物としてではなく、記述内容そのものを本質的に規定する内生的な要素としてとりあつかわれることになる。特に、論理実証主義主導の、従来の心理学研究とは、認識論の上でも方法論の上でも一線を画そうとする質的心理学においては、その論文記述スタイルについても、さまざまな形式が——その有効性のチェック作業とともに——試されてよいのではないか。やまだ・南（2001）の言う「表現の冒険」の姿勢である。

「書簡体論文」は、このような意味での「表現の冒険」の一環として位置づけうる。特に、人びとが長期にわたる日常的なやりとりを通じて共同で生成する意味のシステムに対して研究者自身が長期的かつ対話的に関わることによって、それについての理解を獲得しようとする質的研究においては、ここで言う対話的な関わりを直截に表現しうる「書簡体論文」は、有力な表現方法の一つと考えられる。

実際、そのような試みは、過去にも存在する。この後2節で指摘するように、18世紀には、学術的な書籍が書簡体の形式で出版されたこともあった。また、近年の心理学領域に限定しても、たとえば、「発達」誌上で約10年間の長きにわたって交わされた「人生なかば」と題された往復書簡という先駆的事例がある（やまだ・南、1993-2002）。特に、「どのように書くか」ということは、単なる技術ではなく、それ自体が、人間観や対象への迫り方や方法の革新的実践だからで

す」（やまだ・南、2001、p.200）との言明は、本論文を支える基本モチーフでもある。さらに、伊藤・矢守（2009）も、2人の書き手が交わす往復書簡という形式をとっている。この形式は、無根拠に採用されたわけではなく、インターローカルリティという同論文のメインテーマに適合する記述形式として、意識的に選ばとられている。

さて、本論文では、「書簡体論文」の成立可能性について考察を進めるための糸口として、書簡体小説に注目する。書簡体小説は、（往復）書簡のスタイルを採った小説であり、著名な「若きウェルテルの悩み」（ゲーテ）をはじめ、特に、18世紀、ヨーロッパにおいて興隆を極める。もっとも、ここで、書簡体小説に注目するのは、単にそれが（往復）書簡という形式をとっているからではない。そうした文体をもった小説が無理なく成立し、十分な成功を収めた背景に関する、重要で優れた社会心理学的考察がすでに存在し（遠藤、1997など）、かつ、同じく小説の文体に留目し、その特徴について、詩の文体と対照させて分析を試みたバフチン（Bakhtin, 1996）の文体論が、本論文にとって重要な示唆を与えてくれるからである。

以下、2節では、遠藤（1997）、アンダーソン（Anderson, 1997/1991）、大澤（2007）にヒントを得て、書簡体小説の流行とその記述形式を支えた社会的背景について検討する。次に、3節では、2節の議論と、バフチンの小説文体論との接続をはかりつつ、「ユニヴァーサルな記述形式」、および、「ローカルな記述形式」という2つの対照的な記述形式を導出する。次に、双方の性質を併せもつ新たな記述形式として、「インターローカルな記述形式」を提起し、その特徴について集約する。最後に4節で、「書簡体論文」を、「インターローカルな記述形式」を実際に具現化した事例として位置づけ、その特徴と課題について考察する。

2 「書簡体小説」

遠藤（1997）が指摘するように、書簡、すなわち、手紙は、少なくとも現在の感覚では、私的で親密なコ

コミュニケーション・メディアの一種とされている。しかし、18世紀のヨーロッパでは、書簡は、たとえば、サロンなどでパブリックに交わされる会話の延長としてとらえられていた。言いかえれば、書簡は、双方向のコミュニケーションを可能にする、開放的で公共的なメディアとして位置づけられていた。実際、当時、ヨーロッパでは、いわゆる「書簡体ジャンル」が成立し、小説に限らず、政治的な刊行物、思想や社会について論じる書籍など、多くの公刊物が、書簡体で著されていた。

手紙は、特定の個人が特定の個人に宛てて記した文書であるから、基本的には、私秘的で閉鎖的な性質をもっている。そのような手紙に、公共的な性質がもたらされたのは、「手紙の動かしがたい一方向性の構造を開こうとする力が、複数の位相で働いていたから」（遠藤，1997，p.150）だとされる。第1の位相は、手紙を包摂する解釈の空間、つまり、手紙の読まれ方である。当時、手紙は、しばしば、直接の受取人だけでなく、その周囲の人びとの間で朗読されたり、まわし読みされたりした。第2の位相は、手紙の記述形式、つまり、手紙の内部空間に見られる集約的な特徴である。当時、手紙の文面に、別の手紙の内容を直接、間接に引用することは通例であったし、手紙の中に別の手紙をそのまま封入することすらあったという。このように、「1本の手紙の身分自体が複数化」（遠藤，1997，p.150）されていた。

ここで、手紙の記述形式が、社会的なコミュニケーション一般に占める位置や意義を知るには、大澤（2007）にならって、この形式が、以下に述べる2つの対照的なコミュニケーション様式を繋ぐ媒介的な位置にあったことに注目するのがよい。特に、書簡体小説が、それ以前の物語（いわゆる「読書革命」以前の物語形式）と、それ以後の物語（近代的な小説）とを仲介する中間の産物であったことは、本稿の論旨にとって非常に示唆的である。

近代的な小説は、18世紀末から19世紀にかけて、ヨーロッパで、「ネーション」（国家）という社会形態の成立とほぼ同じ頃に成立したとされる。そして、それよりも以前の物語と近代的な小説とは、上述の2つの位相において、つまり、その読まれ方と物語の内部空間の両位相において、際だった断絶を見せる。

まず、読まれ方について見ていこう。「読書革命」以前の物語は、直接的な対面関係を有する人びとから成る親密な共同体の中で、声高らかに朗読された。つまり、小説を読むことは、共同体の営みであった。それに対して、「読書革命」以後の小説は、目で読まれる。とりわけ、個室における黙読が主流となり、読書が個人化した。

ここで非常に重要なことは、個人化した読書は、それと相即的に、同じ小説を個室で黙読する無数の人びとから成る均質な社会的空間（これが「ネーション」に相当する）を生みだした点である。このような社会的空間がもつ意味は、アンダーソン（1997/1991）が「1日だけのベストセラー（小説）」と呼ぶ新聞のことを考えてみれば、よくわかる。同じ新聞を、毎日、ほぼ同時に黙読する個人たちは、対面的な朗読というローカルなイベントを共有する共同体には、もちろん、まったく共属していない。しかし、そうした狭い意味での共同体からの離脱を補償するかのようにより、彼らは、新聞が報じる、相互にほとんど無関係の種々雑多な出来事が、齊しくそこにおいて生じているような、より包括的で均質な社会的空間に所属してもいるのである。

次に、物語の内部空間に目を向けよう。大澤（2007）によれば、近代的な小説が成立する以前、物語は、物語に内属する特定の視点から描かれ、読者もその物語に内属する視点に拘束される。これが、主人公の視点である。だから、たとえば、主人公Aがサッカーをしていたとき、別の登場人物Bは野球をしていたといった種類の事実を知るためには、AとBとが直接出会い、相互に会話を交わす必要がある。出来事の同時性は、物語に内属する視点から事後的に知られるのみである。他方、近代的な小説は、アンダーソン（1997/1991）が言う「meanwhile（この間）」という話法を確立し、複数の登場人物たちが共属する均質な社会的空間を措定し、その空間を外部から見つめる超越的視点を前提に構築されている³⁾。この視点が、作者の視点であり、かつ、小説を読む読者の視点でもある。そして、三人称客観描写は、この形式に親和的な記述形式である³⁾。

あらためて議論を整理すると、近代的な小説の成立以降、個室でそれを黙読する相互に孤絶した個人たちを、それにもかかわらず連帯させているのは、この超

越的な、つまりユニヴァーサルな視点の共有、である。これに対して、読書革命以前の物語は、今ここで共に同じ物語を朗読し、その同じ声を耳にする人びとを局所的に連帯させるローカルな視点に対して現れる。ただし、それら共に物語を享受するローカリティの一つ一つは、あたかも、大海に浮かぶ島々のように個々独立していて、それらすべてを包摂する包括的な社会的空間（正確には、そのような社会的空間の存在をとらえる超越的な視点）は、誕生していない。

以上を踏まえれば、書簡体小説が、物語空間の構成の面でも、読まれ方の面でも、両者の媒介的位置を占めていることは、わかりやすい。

まず、物語の内部空間に注目すれば、書簡体小説は、書簡（手紙）の形式をとっている以上、基本的に、発信者が親しい受信者に向けて一人称で語りかける形式で書かれる。両者は、むろん、交わされる書簡によって構築される世界に内属している。つまり、すべての登場人物を三人称で客観描写可能な超越的立場に立った視点（小説の作者の視点）は、そこでは、未成立である。しかし他方で、少なからぬ書簡体小説が、交わされる書簡をたまたま入手した者、すなわち、遠藤（1997）の言う「編集者」の手になるという体裁をとるなど、物語世界への内属から超越する視線も芽生えつつある⁴⁾。

次に、その読まれ方に注目しても、書簡体小説は、両者の性質を混在させている。すなわち、一方で、それは、公刊物である以上、相互に面識のない不特定多数の読者から成る社会的空間を念頭に置いている。しかし他方で、典型的な書簡体小説である「パメラ」（リチャードソン）が、パメラの手紙を読んで改心する別の登場人物を、小説「パメラ」そのものを読む読者のモデルとして描くなど、書簡体小説は、実際に、書簡を受け取ったようにそれが読まれることを期待している（大澤、2007）。すなわち、書簡を受けとるほどに親密な人間関係の内部でそれが読まれることも、また同時に想定されているのである。

書簡体小説に見られる、以上のような融合的性質は、手紙というメディアが有する中間的性質の反映でもある。手紙は、「離れたところにいるその書き手を、受け手が属する共同体に再帰属（その2人がすでに友人である場合）させ、あるいはまた導入（友情の連鎖を

辿った2次的関係、つまり、「友人の友人」である場合）させる」（遠藤、1997、p.150）性質をもっている。つまり、手紙は、近代的な小説、あるいは、新聞が前提にしているようなユニヴァーサルな社会的空間とそれを一挙に見渡す超越的立場を想定しているわけではない。しかし同時に、手紙は、読書革命以前の物語のように、直接に朗読の声が届く範囲のローカリティの中で、その直接的で対面的な交流によって連帯する共同体と、そこへの完全な内属を仮定しているわけでもない。手紙が前提にしているのは、両者の中間的な事態、すなわち、複数のローカリティが、それぞれの固有性や異種性を保持しながらも相互に連結することによって一つの全体をなしている様態——まさしく、インターローカリティと呼ぶにふさわしい社会的関係性なのである⁵⁾。

3 バフチンの小説文体論

以上に述べた手紙（書簡）というコミュニケーション様態の特徴、すなわち、ユニヴァーサルリティとローカリティの混合的性質、言いかえれば、インターローカリティを反映した特徴は、バフチン（1996）の小説文体論と関連づけることによって、さらに明確化できる。

バフチンは、詩の文体と対照的な小説の文体の特徴を「言語の多様性」（バフチン、1996、p.70）に求めている。その上で、その特徴が、「発達した芸術的散文——特に小説——の文化を持ち、長く緊張した言葉とイデオロギーの歴史をになっている民族の国民的標準語」（同 p.69）が有する特徴と対応関係にあると指摘している。すなわち、国民的標準語——ひいては、それと対応関係にある小説の文体——とは、「本質的に、組織された小宇宙^{ミクロコスモス}であって、それは国民的なレヴェルにおいてだけでなくヨーロッパ全体における言語的多様性の^{ラズンレーチエ}大宇宙^{マクロコスモス}をも反映している。標準的文語の統一とは、一つの閉じられた言語体系の統一ではなく、相互に接触し、相互に自己を意識する〈諸言語〉（これら諸言語のうちの一つが、狭義の詩的言語である）のきわめて独特な統一である」（同 p.69）。

ここで注意すべきは、最後の「独特な統一」という用語である。この用語に、バフチンが言う「小説の言葉」とは、その中に異種性と多様性を含みつつも、同時に全体としての統一性をも保持しているような独特の状態であることが示されている。すなわち、一方で、「小説の言葉」の内部には、「詩の言葉」に代表される閉鎖的な統一性（諸言語）が島宇宙状に存在する。これは、ちょうどヨーロッパにおける国民的標準語が、実際にはその内部に、ヨーロッパに存在する言語的多様性を、特定の地方や民族にのみ通用する方言として包摂しているのと類比的である。しかし他方で、それらは、互いに他の言葉を「収奪」(appropriation; バフチン, 1996, P.67) する関係を取り結び、「半ば自己の、半ば他者の言葉」(同 p.165) と化する。その結果として、〈諸言語〉の複合体である「小説の言葉」は、「独特な統一」も見せるのである。

つまり、バフチンの言う「小説の言葉」は、一方で、それが「独特な統一」を示しているという側面に注目すれば、2 節で指摘した均質でユニヴァーサルな社会的空間に類似している。なぜなら、「小説は自己の中に諸ジャンルの言語の複数のパロディの様式化…(中略)…などの、様々な種類の様式化およびそれらの言語の直接的提示を統一することができる」(同 p.64; 傍点引用者) からである。しかし他方で、その中に散在する〈諸言語〉(「詩の言葉」)のの一つ一つに注目すれば、それは、対面的な関係に規定されるローカリティに類似している。実際、バフチンは、「まだ細分化されていない単一の社会圏、そのイデオロギーと言語が実際にまだ分化していないような社会圏の境界を詩が踏み越えていないような、稀有の詩の時代」(同 p.75) においては、「この統一が素朴な形で与えられる」(同 p.75) と論じている。

重要な論点なので、若干視点を代えて、同じことを繰り返しておこう。バフチンは、次のように言う。「[散文作家は] 言語を半ば他者のもの、あるいは完全に他者のものととどめておき、しかし、同時に、結局はやはりそれを自分の志向に従わせる」(同 p.77)。この言明の前段部分を純化し、言葉を限りなく他者のものへと委ねていけば、複数の言葉を総覧する作者の存在は極小となり、前節に言う読書革命以前の物語が、それぞれのローカリティの内部において相互に独立に

生産・消費される社会的空間が得られる。このような社会的空間に特徴的な記述形式を、以下、「ローカルな記述形式」と呼ぼう。他方で、この言明の後段部分を純化し、作者自身の志向性を強化していけば、その極限值として、前節に言う読書革命以後の小説が誕生し、同時に、それを個人的に消費する無数の読者のすべてをその内部に従えるような包括的でユニヴァーサルな社会的空間が得られる。このような社会的空間に特徴的な記述形式を、以下、「ユニヴァーサルな記述形式」と呼ぼう。

以上から、バフチンが言う「小説の言葉」、とりわけ、それが呈する、言語的多様性を含みながらも、それでも「独特な統一」を示す文体とは、「ローカルな記述形式」と「ユニヴァーサルな記述形式」の双方の性質を混融させた文体、すなわち、「インターローカルな記述形式」とでも称すべき記述形式であることがわかる。より丁寧に表現するならば、バフチンの洞察は、一見、作者を頂点とした「ユニヴァーサルな記述形式」とも映る読書革命以降の近代小説が、実際には豊かな「言語的多様性」(複数の多様な「ローカルな記述形式」)を伴っていることを見いだした点にあると言えるだろう。言い換えれば、近代小説も、その基幹的構造に、そのルーツとなった書簡体小説——ひいては、それ以前のローカルな物語——の特性をとどめているのである。

(近代)小説が示す「言語的多様性」の基底に、多様で異質な他者たちの言葉の間の「対話的な定位」(バフチン, 1996, p.38) があるとすれば、それをより明示的に(再)導入することが試みられてよいのではないだろうか。すなわち、散文の作者が小説世界において成立させている多様な諸言語の間の「収奪」の関係性を、より明示的な形で実現することも有用ではないだろうか。「収奪」の関係性を、「内的対話性」(同 p.44) としてではなく、よりあからさまな応答的対話として表現しようとするアプローチである。複数の書き手による書簡を「編集者」が媒介する形式といった書簡体小説は、ここで言う「インターローカルな記述形式」を、(近代的な)小説よりも純粋な形で実現させている点で、そうしたアプローチの有力候補となりうるだろう。

以下、節をあらためて、これまでの考察を、心理学

領域、特に質的心理学における学術的な研究や実践に関わる記述（学術論文や観察レポートなど）の文体に引き移してみよう。

4 「書簡体論文」の可能性と課題

1 「ユニヴァーサルな記述形式」と「ローカルな記述形式」

一つの仮説として、以下のようなラフな対応づけが許されるのではないだろうか。

まず、「ユニヴァーサルな記述形式」は、論理実証主義に基づく、伝統的な心理学論文の記述形式と対応させることができる。これは、アメリカ心理学会が推奨する書式に代表される記述形式でもある（American Psychological Association, 2001; 能智, 2007）。杉万（2006）が指摘するように、論理実証主義をメタ理論とする心理学研究は、外在的な事実を、論理的な言説として正確に表現しようという前提に立つ。観察や記述の対象となる現象に対して、観察し記述する自分自身は完全に外在しようとする仮定と、これまで述べてきた意味での超越的視点の成立とが等価であることは、明らかであろう。

同時に、このとき、この言説を、徹底的に「非人称化」（杉万, 2006, p.31）することが志向される点が、きわめて重要である。言説の内容が、言明をなす者によって左右されてはならないとされるのである。非人称化された言説とは、万人に対して妥当する言説であり、言い換えれば、客観的な事実を言いあてた（とされる）言説のことである。この普遍的な妥当性を得た言説、すなわち、客観的事実が登録される空間こそが、近代的小説、あるいは、新聞が前提としている、均質でユニヴァーサルな社会的空間に他ならない。「ユニヴァーサルな記述形式」が、この作業にフィットした形式であることは、言うまでもない。

この点、心理学論文の記述スタイルについて指導するガイドブックに、「可能な限り、能動態を使用せよ」との助言があることは、興味深い（American Psychological Association, 2001, pp.41-42）。このこと

は、——実際のところ、日本文、英文を問わず、多くの論文で、依然として多数の受動態表現が使われている事実を考慮すれば——むしろ、受動態への志向が根強いことを暗示している。言うまでもなく、受動態においては、当該の言説をなした主体が主語（I や the author）として明示的に登場しない。このことは、伝統的な心理学論文が、研究が見いだした知見を非人称化された言説として提示するスタイルを、その理想像として位置づけていることを物語っている。すなわち、研究の知見を、その発見主体に依存しない、また、その適用範囲が時空的に限定されない普遍的な妥当性をもった言説として提示しようとする無意識の動因がここには働いているものと解釈できる。

他方、「ローカルな記述形式」は、時間的かつ空間的に限定された特定の現場（ローカリティ）を対象とした観察手記や日誌、あるいは、最終的な研究論文へとまとめあげられる以前の段階の観察メモなどに見いだすことができる。たとえば、医療や消防などの現場で、勤務シフトの交替時に引き継ぎ目的で、「ローカルな記述形式」をとった言説が実際に声に出して読まれる場面を想像すると、先に示した物語の朗読空間との対応性が明確になる。また、特定の現場で共同研究やアクションリサーチ（矢守, 2007a）に従事する複数の研究者や当事者が、現場に関するそれぞれの観察結果や現状認識を披瀝すべく資料やメモを交換している状況も、これと同様に考えることができる。

いずれにしても、こういったタイプの記述は、「だれが」観察し記述したのか、「どの立場から」観察し記述したのかに大きく依存する。かつ、そうした人称帰属性が、むしろ重要な意味をもつ。また、「ローカルな記述形式」は、当該の現場に関して、未だ言説化されざる情報を、それにもかかわらず共感覚しうる共同体の内部でこそ、より大きな効力を発揮する点も重要である。すなわち、「ローカルな記述形式」をとる書き手は、その聞き手とともに、観察や記述の対象となる特定の現場（ローカリティ）に内属しており、その内属性こそが、記述の十全な理解を支えているのである。個々の現場（ローカリティ）における問題解決、あるいは、そのために必要とされる現場の現状認識が、研究を構成する一連の流れの中で、その時点における主要目的となっている場合、このような記述形式も当

然要請されるし、かつ有効でもある。

2 〈意味のシステム〉の交錯点としての「インターローカルな記述形式」

以上に述べた2つの記述様式に対して、書簡体小説に相当する第3の道——「インターローカルな記述形式」をとる「書簡体論文」——が、心理学に関連する研究・実践においても成立しうると考えられる。すなわち、複数の「ローカルな記述形式」が言語的多様性を呈したまま、インターローカルに接続され「独特な統一」を見せているような記述様式、が存在すると考えられる。

もっとも正確に表現するならば、この第3の道こそが本流であると称すべきかもしれない。すなわち、杉万(2006)が言う「人間科学」においては、研究者が研究対象(者)に対して純粋に超越的第三者の位置を占めて——言いかえれば、近代的な小説の作者の位置に立って——、「ユニヴァーサルな記述」をなすことは、極限形としてはありえても実際には困難である。他方、研究者である以上、いかに特定の現場に深く関与しようとも、そこに完全に内閉して——言いかえれば、詩の作者のように、「その外には何ものも存在せず、その外に何ものも必要としない唯一無二のプトレマイオスの世界」(バフチン, 1996, p.55)に生きて——純粋に「ローカルな記述」をなすことも、極限形としてはありえても実際には困難である。すなわち、現実には、多くの研究者は、ここで言う第3の道、すなわち、アカデミックな言語をその一部に含む、多様かつ複数の「ローカルな記述」を、「編集者」の立場から、「インターローカルに記述」する営みに従事していると言えるだろう。

以下、これまでの議論と整合性を保つべく、「インターローカルな記述形式」としての「書簡体論文」についても、その内部空間、および、その読まれ方、この2つの位相に注目して詳しく考察を進めていこう。

第1に、「書簡体論文」の内部空間について考えよう。まず、その空間が、複数の、人称化された言説から成る多声的な空間として、「意図的に」構成されていることが重要である。「書簡体論文」では、研究にコミットした複数の研究者がなした言説が頭名で人称

化されたまま記載されている⁶⁾。これに対して、「ユニヴァーサルな記述形式」をとる通常の論文においては、たとえ、それが共同研究であろうとも、また、たとえ、その著者として複数の氏名が列記されていようとも、最終的には、複数の人称化された言説は統一化され、かつ脱人称化されて、非人称の言説として提示される。この点では、「書簡体論文」は、「ローカルな記述形式」に類似していると言える。

しかし、「書簡体論文」は、「ローカルな記述形式」と同一というわけではない。それは、2人(一般には、複数の)書き手による言葉の応酬(往復書簡)というスタイルを明示的にとっている事実を負っている。ポイントは、言葉の応酬は、多かれ少なかれ、書き手がそれぞれに所属する異なるローカリティ間のインターローカルな関係性を誘発する点にある。再び、バフチンの議論を引こう。「生きた言葉が対象に関係するしかたは、一つとして同じではない。言葉と対象、言葉とそれを語る人格との間には、同じ対象、同一のテーマに関する異なる、他者の言葉の、弾力的、しばしば見通すことの困難な媒体がひそかに介在している」(バフチン, 1996, p.39)。先に3節で触れた「内的対話性」という用語に見られる通り、バフチンの考えによれば、ここで提起されている他者の性質は、他者が明示的に現れないようなケースでも消失することはない。しかし、他者と具体的に言葉をやりとりする状況——たとえば、対面的な会話や、書簡をやりとりするような状況——においては、それはいっそう明確な形であらわれる。すなわち、「聞き手への話者の志向は、聞き手の固有な視野、固有な世界への志向であり、そのような志向は話者の言葉の中に全く新しい諸契機を持ちこむ。というのも、このことによって異なるコンテクスト、異なる視点、異なる視野…(中略)…異なる社会的〈言語〉のコンテクストの相互作用が生まれるからである」(同p.49)。

以上の議論は、バフチンが「異なる社会的〈言語〉のコンテクスト」と呼んでいるものが、本稿で「ローカルな記述形式」と称してきたものに相当すると考えれば、その内容をよく理解することができる。つまり、往復書簡という媒体を介して対峙しているのは、もちろん、物理的な意味での個人(書き手)ではない。それぞれの内部に、態度や意見といった概念で称される

心的な属性を保持した個人でもない。そうではなく、両者が、それに依拠して態度や意見を構築している「ローカルな記述形式」、さらに遡っては、「ローカルな記述形式」自体を成立せしめているローカルな〈意味のシステム〉——それぞれのローカルティにおいて、諸々の対象の同一性（それが何であるか）を指示するための差異のシステム——の総体が、往復書簡の上で交錯していると考えなくてはならない⁷⁾。バフチンの次の言明は、この提題の反映である。「二声性は自らのエネルギーを、自らの対話化された両義性を個人間の意見の不一致や食い違い、衝突などから吸収するのではない。…（中略）…この二声性は社会・言語的な本質的矛盾、あるいは多言語性に深く根ざしている。…（中略）…個人間の矛盾は、この場合には、社会的諸言語間の矛盾の諸力、吹き荒れ、否定なく彼らの中に矛盾を生じさせ、その本質的な言語的矛盾によって彼らの意識と言葉とをみだす諸力の氷山の一角に過ぎない」（バフチン、1996、pp.129-130；傍点引用者）。

この論点は、杉万（2006）が提唱する「人間科学」と関係づけておくことができる。杉万は、「人間科学においては、現状認識にせよ、理論にせよ、いかなる言説も、すでに自らの否定を潜在的に携えている。それは、言説が意味という区別のシステムであることに起因する宿命である」（杉万、2006、p.39）と指摘する。ここで、往復書簡を交わす書き手たち——正確には、〈意味のシステム〉たち——が、潜在的に保持していた自らの否定を顕在化させる導火線の役割を相互に果たす、と考えることができなだろうか。すなわち、一方の書き手の言説を支えるローカルな〈意味のシステム〉に定位したとき、それによって規定される認識の限界線を越えた言説（自らの否定）は、当該の〈意味のシステム〉の内部からは出てこない。しかし、そうした言説——たとえば、「想像を超えた洞察」や「予想もしなかった解決案」をもたらす言説——は、実は、自らのすぐそばに潜在的に控えている。その在処が、自らの〈意味のシステム〉にとつての外部となる他者の〈意味のシステム〉なのである。とりわけ、書簡を交わす程度の中間的な関係、すなわち、書簡を交わす必要がないほどに親密で直接的な関係でもなく、逆に、書簡のやりとりがそもそも成立しないほどに疎遠な関係でもない——そのような関係性にある 2 人

（正確には、2 つの〈意味のシステム〉）の間には、このような関係、すなわち、実は、互いが互いの「否定」であることに気づくための起爆剤となりうるような関係、が成立しやすいと思われる⁸⁾。

3 連鎖する「インターローカルな記述形式」

議論を、「書簡体論文」の読まれ方の位相に移行させよう。「書簡体論文」は、どのような読者を想定して書かれるべきなのだろうか。ここでも、書簡体小説に関する議論が参考になる。2 節で述べたように、書簡体小説は、近代的な小説のようにではなく、実際の書簡のようにそれを読む読者を想定していた。これと同型的に、「書簡体論文」も、「ユニヴァーサルな記述形式」をもった通常の学術論文のようにではなく、実際の書簡のようにそれを読む読者を念頭に置いてみてはどうだろうか。

書簡のように「書簡体論文」を読む読者とは、広い意味で、応答する読者、のことである。現在の学界慣行を前提とする限り、「書簡体論文」の最初の読者は、論文の査読者となるはずで、現実には、査読者と論文著者との間には、論文審査という形の応答が交わされる。さらに、——幸いにして審査をパスすれば——「書簡体論文」は、学術誌上で、より広範な読者の目にさらされることになる。ここでもまた、読者と論文著者との間で応答が交わされる場が、「書簡体論文」に限らず、実際に設定される場合がある。たとえば、コメント論文とリプライ論文のやりとり（特定の、顕名の読者との間で）、あるいは、「読者の声」と「著者からのリプライ」といったやりとり（不特定の、あるいは、匿名の読者との間で）、である。

したがって、「書簡体論文」を書簡のように読むプロセスを素直に実現しようとするれば、以上のような既存のシステムを拡大・発展する方策を考えることができる。紙媒体による制約の数々（たとえば、即応性など）が気にかかるようであれば、Web 媒体の有効活用を考えてもいいだろう。Web 媒体を利用すれば、「書簡体論文」をめぐる応答の連鎖を積み重ねるための仕組みを構築することは容易である。もっとも、ここで重要なことは、Web 媒体の仕様、デザインといった些末なことでは、もちろんない。大切なのは、いかにし

て、「書簡体論文」が有する「インターローカルな記述形式」としての性能を最大化するか、である⁹⁾。

この点で、書簡体小説の原点に、「盗まれた手紙」という形式が存在したこと（遠藤，1997）は、きわめて示唆的である。書簡体小説は、交わされる書簡を「たまたま」入手した者（つまりは、その小説の作者なのだが）が、編集者として編集したという形式を、しばしばとるのである。2節で指摘したように、これは、書簡体小説に、その全体を鳥瞰する超越的な視点が欠落している（不十分である）ことの反映であった。そうだとすれば、「書簡体論文」をめぐるやりとりについても、それが応答の連鎖を拡大させていくとしても、その帰趨を超越的な位置から俯瞰するような絶対的視点、言いかえれば、すべてをモニターしコントロールする視点が存在しないこと、が重要となるのではないだろうか¹⁰⁾。これは、「いかにインターローカルティが空間的、時間的に拡大しようとも、あくまでも（拡大した）ローカルティであり、決してユニヴァーサルティではない」（杉万，2006，p.41）ということでもある。もっとも、ちょうど、バフチンの言う「小説の言葉」が、「独特な統一」を示していたように、一連のやりとりを、まったく無関連の言説群としてではなく、互いにやりとりされるひとまとまりの書簡群として了解可能な程度の包括性を、それに与えるようなコントロールは必要だろう。しかし、これは、まさに「編集者」の機能であり、「作者」の役割ではない。

だから、「書簡体論文」が書簡のように読まれていく過程では、反発、無視、無理解、誤読、意図せざる敷衍といったことが、当然にも生じる。そうすると、各言説のオーサーシップやクレジットに対する不安が生じるかもしれない。しかし、言語的多様性によって特徴づけられる「インターローカルな記述形式」における言葉は、バフチンが言うように、そもそも最初から「半ば自己の、半ば他者の言葉」なのである。それは、また、「新しい素材、新しい状況に適用され、新しいコンテクストと相互に照らし合う…（中略）…そればかりでなく、他の内的説得力のある言葉と緊張した相互関係を開始、闘争関係に入る」（バフチン，1996，p.165）ことが宿命づけられている。そして、繰り返し強調してきたように、この闘争関係を第三者的に調停可能な超越的な視点が、最終的に予定されて

いるわけではなく、まして最初から準備されているわけではない。

だから、「書簡体論文」をめぐるやりとりを、たとえば、その初発となった「書簡体論文」の著者から眺めた場合、18世紀の手紙のやりとりについて遠藤（1997）が紹介する事例に見られるように、自分が書いた書簡（論文）の内容が、直接の受け手ではない遠方の意外な人にまで伝わっているのを知って驚いたり、思わぬ方向に発展を遂げているのを知って感銘を受けたりする可能性が十分にあるということである。このとき、起点となった「書簡体論文」は、言ってみれば、「盗まれた論文」と化しているのである¹¹⁾。このような事態は、「ユニヴァーサルな記述形式」とそれに依拠する伝統的な論文スタイルを墨守する限り、必ずしも肯定的な評価を受けないであろう。しかし、質的心理学の間口をさらに拡大する意味でも、また、インターローカルな実践や研究を支える新たな記述形式を模索する意味でも、「書簡体論文」をはじめとする「インターローカルな記述形式」の可能性を真剣に探るべき時期に来ていることだけは、たしかだと思われる¹²⁾。

注

- 1) 手紙をめぐるこうした慣行は、現在の常識からは、にわかに信じがたい。しかし、類似の事態が、目下、Web媒体を利用したコミュニケーション領域で大々的に進行していることは、だれの目にも明らかである。「書簡体論文」とWeb媒体との関係性については、この後、4節3項で言及する。
- 2) CNN等の英語ニュース番組で、実際に、このフレーズをしばしば耳にすることができる。
- 3) なお、三人称客観描写とは、文体記述の表面的な様式（たとえば、「彼は…」、「沢崎は…」など、主語としてどのような用語を使用するか）と直接に一致するわけではない。たとえば、「わたしは…」の一人称で通される小説であっても、当該の主人公の視点が、一連の出来事の後に作者および読者が有する超越的視点に追いつくことが想定されている場合、それらは、ここで言う近代的な小説に含まれる（大澤，2007）。
- 4) 作者、特に、散文の作者（3節参照）ではない点に注意されたい。

- 5) ちなみに、「ニュースレター」は、ここで言うユニヴァーサルリティとローカリティの両極を中和するメディアとして構想されていた。つまり、公共的な「ニュース」(新聞)、私秘的な「レター」、双方の性質を兼ね備えた媒体が目指されていたのである。
- 6) この点、「書簡体論文」を、*masked review* のシステムとどのように整合させるか、という現実的課題は存在すると認識している。
- 7) もちろん、往復書簡をやりとりする 2 人は、まさに書簡のやりとりという社会的行為を、有意味に、かつ滞りなく成立せしめている限りで、2 人に共通する(第 3 の)ローカリティに共帰属しているとも言える。後述するように、このことは重要な意味をもつのだが、さしあたって、ここでは、往復書簡を交換する 2 人が互いに他に対して、「全く新しい諸契機」を持ちこむ、相互に異なる〈意味のシステム〉を基盤とする異なるローカリティへと分属しているという事実の方を強調しておこう。
- 8) 同じ現場で問題解決にあたる異分野の研究者間、アクションリサーチを共同で進める研究者と当事者間、異なる現場で同様の課題にとり組む当事者間など、ここで議論しているタイプの関係性が生じうるケースは少なくない。言いかえれば、これらの人びとを書き手とする「書簡体論文」が、——必要に応じて、しかるべき「編集者」の助力を得ることで——十分成立可能だと思われる。
- 9) ここで議論している「インターローカルな記述形式」と同様の効果を、「書簡体論文」とは違った方法で実現しようとした例としては、——いずれも防災領域における事例であるが——ゲーミング媒体を活用した事例(矢守, 2007b; Yamori, 2007; Yamori, 2008)、ボランティアな語り部活動をめぐるアクションリサーチ(矢守・船木, 2008)、などがある。
- 10) 先に挙示したやまだ・南(2001)も、「毎回どこに行くのか予期できないこの往復書簡」(同 p.197)と記している。
- 11) 「盗まれた手紙」とは、「略奪」された手紙であり、そこに「交換」の意識が欠落している点に留意しつつ、視点を反対側に移行させれば、それは、「贈与」された手紙でもある。〈意味のシステム〉のインターローカルな伝達が、等価あるいは不等価な「交換」ではなく、「贈与と略奪」の形式をとることの重要性と必然性については、大澤(1990; 特に pp.183-207 の記述)に緻密な理論的論考があり、また、この論考を受けた明快な解題が杉万(2006; 特に pp.44-66 の記述)によって提供されている。また、バフチンが、同じコンテクストで、「取奪」(appropriation)という独特の用語を用いるのも、同じ理由によるもの

- と思われる。*appropriation* の語義については、ワーチ(Wertsch, 1995/1991)にも、詳しい解説がある。なお、ここで論じているインターローカルなプロセスの初発点は、その後の「贈与と略奪」とは対照的に、往復書簡、すなわち、書簡が何度も「交換」されるスタイルをとっていた(たとえば、伊藤・矢守(2009))。このことも、大澤(1990)や杉万(2006)の理論的観点からは興味深い事実なのであるが、ここでは詳細に立ち入らない。
- 12) いわゆる「羅生門テクニック」など複数の人の語りを重層的に提示する手法(たとえば、ルイス, 1969/1961)や、ライフヒストリー研究で指摘されている「2人のオーサー」の問題(たとえば、小林, 2000)も、論文の最終的な書き手自身が、語る当事者の一員として考察の範囲に組み込まれる限りで、「インターローカルな記述形式」を模索する動きと考えていいと思われる。さらに、インタビューやシンポジウムなどにおける発言を再編成した論文も、同じ問題意識を共有していると言えるだろう。具体的には、「質的心理学研究」誌に限っても、川喜田・松沢・やまだ(2003)や大谷・無藤・サトウ(2005)などの例がある。

引用文献

- American Psychological Association. (2001). *Publication manual of the American Psychological Association (5th ed.)*. Washington, D.C.: American Psychological Association.
- アンダーソン, B. (1997). 増補: 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行(白石さや・白石隆, 訳). 東京: NTT 出版. (Anderson, B. (1991). *Imagined communities: Reflections on the origin and spread of nationalism*. New York: Verso.)
- バフチン, M. (1996). 小説の言葉(伊東一郎, 訳). 東京: 平凡社(平凡社ライブラリー).
- 遠藤知巳. (1997). 手紙の変容・〈声〉の誕生——書簡体空間と『フランケンシュタイン』. 桑野隆・番場俊(編著), ミハイル・バフチンの時空(pp.149-168). 東京: せりか書房.
- 伊藤哲司・矢守克也. (2009). 「インターローカリティ」をめぐる往復書簡. 質的心理学研究, 8, 43-63.
- 川喜田二郎・松沢哲郎・やまだようこ. (2003). KJ 法の原点と核心を語る——川喜田二郎さんインタビュー. 質的心理学研究, 2, 6-28.
- 小林多寿子. (2000). 二人のオーサー. 好井裕明・桜井厚(編), フィールドワークの経験(pp.101-114). 東

- 京：せりか書房.
- ルイス, O. (1969). サンチェスの子供たち 1, 2 (柴田稔彦・行方昭夫, 訳). 東京：みすず書房. (Lewis, O. (1961). *The children of Sanchez: Autobiography of a Mexican family*. New York: Random House.)
- 能智正博. (2007). 論文の書き方. やまだようこ (編), 質的心理学の方法 (pp.38-51). 東京：新曜社.
- 大澤真幸. (1990). 身体の比較社会学 I. 東京：勁草書房.
- 大澤真幸. (2007). ナショナリズムの由来. 東京：講談社.
- 大谷尚・無藤隆・サトウタツヤ. (2005). 質的心理学が切り開く地平——日本質的心理学会設立集会「シンポジウム」. 質的心理学研究, 4, 16-38.
- 杉万俊夫 (編著). (2006). コミュニティのグループ・ダイナミックス. 京都：京都大学学術出版会.
- ワーチ, J. (1995). 心の声——媒介された行為への社会文化的アプローチ (田島信元・佐藤公治・茂呂雄二・上村佳世子, 訳). 東京：福村出版. (Wertsch, J. (1991). *Voices of the mind: A sociocultural approach to mediated action*. Cambridge: Harvard University Press.)
- やまだようこ・南博文. (1993-2002). 人生なかば——ふたつながら生きる (第1回—第35回). 発達, 55-89. (連載).
- やまだようこ・南博文. (2001). あとがきに代えて——「21世紀と表現——往復書簡の試みから」. やまだようこ・サトウタツヤ・南博文 (編), カタログ現場心理学——表現の冒険 (pp.195-202). 東京：金子書房.
- やまだようこ. (2006). 質的心理学とナラティブ研究の基礎概念——ナラティブ・ターンと物語の自己. 心理学評論, 49, 436-463.
- 矢守克也. (2007a). アクションリサーチ. やまだようこ (編), 質的心理学の方法 (pp.178-189). 東京：新曜社.
- 矢守克也. (2007b). 「終わらない対話」に関する考察. 実験社会心理学研究, 46, 198-210.
- Yamori, K. (2007). Disaster risk sense in Japan and gaming approach to risk communication. *International Journal of Mass Emergency and Natural Disaster*, 25, 101-131.
- Yamori, K. (2008). Narrative mode of thought in disaster damage reduction: A crossroad of narrative and gaming approach. In T. Sugiman, K. Gergen, W. Wagner, & Y. Yamada, (Eds.), *Meaning in action: Constructions, narratives and representations* (pp.241-252). Tokyo: Springer-Verlag.
- 矢守克也・舩木伸江. (2008). 語り部活動における語り手と聞き手との対話的關係——震災語り部グループにおけるアクションリサーチ. 質的心理学研究, 7, 60-77. (2008.1.8 受稿, 2008.8.20 受理)